

天皇の即位と大嘗祭

(文責在記者)

村 上 重 良

今日は東京神学大学のフォーラムということでございまして、お招きを頂きました。私が頂いておりますテーマは、「即位の礼と大嘗祭」というテーマがあります。大体1時間ぐらいにわたってお話しを申しあげたいと思います。

こういう問題は極めて最近一般的な関心も高まっておりますし、いわゆる市民の方とかいろいろな集会などでもお話しをすることが私も多いわけですが、本日は皆様方神学の学徒でいらっしゃる、専門の先生方でいらっしゃいますので、やや堅苦しいお話しになるかも知れませんが、いわゆる講演会や講座風でない議論のようなものも含めましてこのテーマについて私が考えていることを申し上げたいと思います。そして60分でございますので、この問題、具体的な、実証的な問題を含めると大変膨大なことを申し上げる必要があるわけでありましょうけれども、ここでは大体3つに絞ってお話しを申し上げたいと思います。

それは、まず大嘗祭というものは本来どういう起源を持ち、どういう性格の祭りであるか、ということをお願いしたいと思います。

それから2番目には、この大嘗祭は、古代国家における王位継承儀礼であります。ですから古代国家で整えられた王位継承儀礼とはどういうものかということをお大嘗祭の内容も含めてごく簡単にご紹介したいと思います。

それから3番目には、明治維新以後の近代天皇制国家においてこの王位継承儀礼はどのような形で法的にも整備され、そして行われてきたか、そしてそれが今、何が問題になっているのかという近代・現代の日本における王位継承儀

礼の問題を最後に申し上げたいと思います。

そこでまず大嘗祭を語るためには、ごく辞典的な簡単な説明をあらかじめ申し上げる必要があると思いますが、一番分かりやすく考えてみますと、まず第一に大嘗祭というのは新嘗祭の大祭であります。そしてそれは新しい天皇が天皇となって一度だけその初めに行う新嘗祭を意味しております。ですからその意味で、新嘗祭は毎年の稲の収穫祭でありますけれども、大嘗祭は王権の祭りという性格を持つことになります。その点に違いが出て参ります。しかし、本質的には大掛りな新嘗祭だとお考えいただきたいと思います。そしてこの大嘗祭は、古代天皇制国家のごく早い時期に制度化されたものと考えられ、そして変転を経て受け継がれ、あいだ中断致しますけれども幕末に至り、そして明治維新後再び拡充強化されて敗戦に至った、大体そういう経過を辿っております。

そこで王位継承儀礼の中心にあるということをあらかじめ申し上げておきたいわけではありますが、天皇制の確立と共にできた継承儀礼、大嘗祭はもちろん中心ではありますが、その前後に大きなものがいくつか付け加えられていきます。その経過は予め、稲の収穫祭である新嘗祭のことを申し上げた後で及ぼしたいと思います。

まず新嘗祭ではありますが、これは勤労感謝の日という国民の祝日がございますね、これが敗戦前は新嘗祭という国の祭日でありました。11月23日ですね。そしてこの新嘗祭は戦前の日本では、天皇が宮中において行うもっとも重要な、大きな祭りとして毎年秋に行われていたわけであります。そしてその起源は、古代国家の成立期に遡るであろうと考えられておりますが、このような日本書紀などに記されている新嘗祭には長い長い前史がございます。それは日本の原始農耕社会が受け伝えてきた稲の祭りであるというのが、そもそもの起源であります。この問題も詳しくお話ししていくと大きなテーマを含むわけですが、ごく教科書風に申しますと、ご承知のように縄文晩期、弥生時代の始まりごろから日本列島には急速に稲の水田耕作が広がってまいります。そして社会生活そのものも稲を作る原始農耕社会という形で整っていくわけでありま

す。この稲作りの社会の宗教生活のおそらく一番基本になったものは、翌年の稲を豊かに実らせるための祭りであったと考えられます。こういう祭りは、世界のどの原始的な農耕民族にも見られるものと思われませんが、日本の場合は稲が大陸からあるいは南方から海を経て伝わって、そして高度な水田耕作の技術が東へ進むわけなんですね。そして、このようにして成立した農耕儀礼、これが日本の原始宗教の骨格を作ったのだらうと考えられております。

どういう内容を持つかと言いますと、稲は今日でも同じでありますけれども、春先に農作業を開始して、秋に収穫を致します。ですから稲をめぐる祭りは、春先の農耕開始に先立っての祭り——普通これを予祝と申します。それから収穫が終わって、その収穫を神に感謝する収穫祭に当たるもの。この二つから成り立っていたと考えられます。日本の古い呼び方では、この春先の祭りの方は年乞いといいました。それから秋の収穫の祭りの方は芯嘗と言っております。

「年」というのは1年ということであり、また稲の実りの意味に使います。ですから、年乞いというのは稲の実りを願う祈る祭りという意味になります。ですから今日神社で「祈年祭」というのは「祈る年」と書きますね。これは年乞いの伝統を漢字に移したものであります。稲の実りを願う祭り、祈る祭りであります。それに対して秋の方は、収穫祭は「新嘗」であります。この語源には今日でも諸説あります。しかしその意味するところは新しく取れたお米を神に捧げて感謝する。そして翌年の実りの豊かならんことを願うという主旨であります。

このように二つの春と秋の祭りを軸として、原始農耕社会の宗教というものは組み立てられていたのだらうという風に考えられます。これが普通に宗教史などで言う「原神道」というものの一番重要な内容なんですね。原神道というのは稲の農耕儀礼が基本でありました。その稲の農耕儀礼は、年乞いと新嘗によって1年の祭りができていたという風に考えられます。そしてどちらが重要かと言いますと、これは今日の神社の祭りの編成にも反映しておりますけれども、新嘗がもっとも重く、年乞いはそれに準ずる軽いという扱いを受けます。それはなぜかと言いますと、農作業の開始で行われる祭りというのはその年の

紀 要 1

農作業についての最終的なお願い・祈りなんですね。ところが新嘗の方は現に収穫があって、みんなが心が浮き立っている。そしてそれを神に捧げることで翌年も同じように豊かに稲が実るということを確実にするための祭りという性格を持っております。そういうことからおそらく新嘗が中心で、より重いと考えたようです。そしてこれは今日の感覚では、皆様方は宗教の方でありますからちょっと違うかも知れませんが、一般の人々はお祭りと言えば非常に形式的なこととしてしか受け取らない風が強いように思うんですね。ところが、言うまでもなくこういう原始農耕の社会では、生産を確保するということは生き残るためには絶対の仕事なんですね。それを滞りなく祭りをすることではじめて神の力で稲が確実に実って自分達は絶滅しないですむということであったろうと考えます。ですからこれは単なるいわゆるお祭りではないのであってですね、全集落を挙げての必死の営みであったろうと考えられます。そういう位置に毎年秋の新嘗があったと考えられます。

そしてこの新嘗祭は、おそらく弥生の社会、それから古墳時代になるわけですが、そういう段階の社会ではその土地の神を招いて行ったものであろうというふうに考えられております。この問題はあまり深入りもできませんが、当時の日本人の意識では土地ごとにその土地を支配している神が住んでいると考えていたものと思われれます。ですからその土地に住んでいる不気味な姿の見えない恐ろしい存在である神、これの意を迎えてですね、そのもたらす害悪を防いでおいて、その力をできれば自分たちに有利に使う、そういう働きかけが必ず必要だと考えられていたものと思われれます。その意味でこういう農耕儀礼でまつる神は、基本的にはその土地の神であったろうと考えられます。

これは実は、神社というものの起源に深くかかわっております。つまり今日全国で8万内外の神社がございますね。そしてその圧倒的多数というのは土地と結びついた小さな神社であります。氏神とか、産土（うぶすな）とか鎮守とか呼ばれる小さい神社、こういうのは「地縁的小社祠」と我々言うんですけど地縁的な神社ですね。これは何を意味しているかと言うと、一定の土地、ひとまとまりの地域があって、そこに住んでいる人たちが土地の神を祭って、そし

て神社というものを管理し、運営していった。これが基本的な形と考えられます。そして実はですね、神社というのは本来ですね、土地神をその土地で祭ったのが元来のあり方であつたろうと考えられております。

ですからその後ですね、お稲荷さんが現われたり八幡さんが現われたり、そういうのは古代以降の発展であります。いろんな神様が登場して神社の祭神がありますが、本来の神社というのは土地神を祀ったものというふうに考えられるのであります。そしてこの土地神はもとよりその土地の神ということに尽きますから、事々しい神名（神様としての名前）を持っていなかったですね。今日は、もっぱら明治維新後の変化が大きいんですけれども、古事記・日本書紀などから付けたものものしい名前の祭神ということになっていきますけど、本来は例えば東京の新宿にある氏神なら「新宿の神」としか呼びようがない、とくに名前がない神が本来なんだというふうに神社界でも考えられている次第であります。ですからそういう現状をたどっていくとまさにそういう原始農耕社会における農耕儀礼、原神道ですね、原神道のあり方が遠く伝わったものというふうに思われます。

そういうことで弥生時代から古墳時代あたりまでは、おそらく村ごとに村の土地神を祭って稲の祭りが営まれていたというふうに考えられます。こういう集落が古墳時代には次々により大きな力でまとめられていって小国家ができてまいりますね。おそらく小国家の支配者、キミとかワケとか呼ばれているわけですが、こういう人たちはそういう自分の支配下の村々の祭祀権（お祭りをする権限）をどんどん上へ吸い上げていったのだろうというふうに考えられます。ですから古代国家の成立には絶対年代についても、それから地域についても諸説あるのは皆様よくご承知のとおりで邪馬台国などは大変話題になっていろいろありますが、全体の成り行きから言えばですね、次第にそういう国家が大きな連合を作ったり、あるいはより強い国を作っていくという傾向が進み、それにつれてその支配領域の祭祀権、もっぱら一番重要なのは新嘗ですから新嘗を行う権限というのはその族長と言いますか首長に帰し、そういう形が進んだというふうに考えられます。ですから各地の小国家が連合したり、

服属したりしてですね、少し大きなものになると、そういう大きなまとまりを治める人間は大君と呼ばれたんですね。日本列島の各地に大君が出現していったと思われます。そして大君の重要な仕事は、自分の支配領域の稲を実らせる仕事だったと考えられます。つまり、自ら祭りを行った。そしてその祭りの効果で翌年の稲がたわわに実る、そういうことを左右する力が、そういう王として地方を作っていたというふうに思われます。こういうのを王権の概念の中では祭司王と言っております。つまり祭りをする権限を持っている王なんですね。priest king というのはそういうものなんですね。そしてその最後に登場したのが大和政権の大君であり、それが古代天皇制国家を作ったというふうに考えられます。ですから大和政権の大君、即ち天皇というものは、そもそも日本の政治支配者、軍事支配者であるというより、日本の国土（日本列島の主要部分という意味ではありますが）の稲を実らせる王だった、そういうふうに考えられます。ここに天皇というものの基本的な性格が定まって行ったという風に思われます。

ですから、天皇を世襲で（血筋で）受け継ぐということは最初から始まります。そして一体そのときに受け継がれる一番のポイントは何かと言えは、それは祭祀の権限（祭祀権）を受け継ぐことであるわけです。ですから毎年秋の新嘗を行う、それが祭司王としては一番重要な仕事となったというふうに考えられます。さて、こういう王は同時にもちろん祭りをただ一人、国を代表する最高の祭司として行われますね。the highest priest ですね。ですからただ者ではないんですね。やはりこれは特別な霊力を持った存在、そして恐れられたであろうというふうに思われます。そういう天皇が代替わりをする、次の天皇が出てくるといえるときにですね、この毎年の新嘗祭が、今度は大嘗祭として営まれる、そういう経過をたどるわけであります。

古代天皇制国家ができてまいりますと、今申しましたように原始社会から古代国家へと歩むわけではありますが、そういう段階で営まれていた宗教が、そのまま国家的規模のものとして整えられていく、これが古代宗教の段階であります。ですから、一番原始的な段階の宗教は宗教学で言う「民族宗教」（ethnic

religion と申しますが) であって、これは集団が自分たちの神を拝する、そしてそのために祭りをする。そういう宗教と言ってよろしいでしょう。ですからそこにはその後の歴史に登場してくる創唱宗教（キリスト教などに代表されます found religion です）と非常に違ってそこには集団の宗教という基本的な性格があります。集団が宗教を担うわけですね。ですから宗教集団という意味では、単位社会集団がそのまま宗教集団になっているという形を取りますので、合致的宗教集団と申します。集団の宗教であるということ。

それから宗教としての教えなど、内容を欠いていて、もっぱら儀礼（祭り）を受け継ぐ、行う宗教です。つまり機能は儀礼に代表される宗教です。そういう特徴がございます。体系のある教えというものは無いと言っていいでしょうね。非常に発達していないものしかない、断片的なものしかないわけです。断片的な観念はいろいろありますが、特に神学になっていくような弁証あるいは理論、そういうものは元々ないんですね。ただ、儀礼がある。そしてこの儀礼を営むことが主たる機能である。そういう宗教であります。ですから非常にプリミティブなものだということですね、宗教としては。

そして、そういうものが国家的規模に受け継がれて発展したものが古代宗教でありますから、天皇制が作り上げた古代宗教というものは基盤はこういう民族宗教のタイプを離れられないわけですね。つまり国家として国家の神を祭るというのが基本にあり、そしてその役割の長に立つ、率いる、その頭に立つ者が天皇だと、大体そういう構造になると思います。

このようにですね、今日の神道はこの民族宗教の構造を伝えているわけですね。そして、古代国家の段階では、こういうふうに古代国家の宗教というかたちで一つの発展があり、そこに仏教や道教が結びつくというふうになって参ります。ですからいよいよ神道自体が習合によって内容を作っていく段階に入るわけです。そういう中であって天皇の宗教と言うべきもの、これが整っていくわけでありまして。そして古代国家はたいへんこういう宗教的儀礼の整備には力を入れます。実に大掛かりなものを次々に考えて整えていくわけでありまして。そしてこのようにして整った、天皇が関与する祭りは、大祀・中祀・小祀とい

紀 要 1

うふうに区別するんですが、毎年の新嘗祭というのは中祀なんですね。古代の制度では中祀，真ん中のクラスの祭りということですね。そして，大祀は唯一大嘗祭だけです。ですから大嘗祭というのは特別の祭りなんですね，というふうに考えられると思われます。

そこですね，大嘗祭がどういう成り立ちということはお分かり頂けたことと思いますので，それでは天皇が受け継がれる，皇位が継承されるという際に何が古代国家では行われるのかということに進んでまいります。大体こういう皇位継承，つまり王権継承儀礼が整うのは7世紀の末ぐらいではないかと考えられます。時代から言いますと大体天武天皇のあたりであろうと見られております。そして，それ以前も天皇が新しく替わるという際に，いくつかの儀式のようなものがあつたことが分かっております。日本書紀などにはそういう点が比較的詳しく記録されているんですが，大体ですね，天皇の位を表す，あるいは身を守る呪物的な宝物として鏡とか，剣とか，玉とかいうものが知られておりますね，3種の神器という，そういうものが古墳時代の各地の族長にもあつたことは明らかでありますけど，そういうことは大和政権にもあつたんですね。そういうことから日本書紀などの記述では天皇の御しるしを新しい天皇のもとに差し上げた，奉つたというような記事もあるわけですね。あるいは鏡とつるぎを奉つた，あるいはけんと鏡，などの記事が見えます。そういう身の回りにあつた立派な宝物を新しい天皇のところに捧げたものであるということは知られます。そして天武天皇ごろから整えられていった形は，おそらく皇位の継承があるとですね，そういう前天皇が持っていたような宝物類，それを新しい天皇が受け継ぐ，これはごく早くからあつたと思われませんが，特にですね，受け継いだ後の新嘗祭を大掛かりにするということが始まったと考えられます。これは新嘗祭が天皇が行う祭りで一番重要なわけですね，ですからそれをさらに大々的に行うということになったのであらうと思われまして。そして更にですね，この大嘗祭が天皇の位を受け継ぐ儀式だということで先ず，強化・拡充されていったわけですが，その際にですね，天皇が替わる，とすぐに鏡とか剣とかいう類のものが新しい天皇のところへ行くわけですから，そういうものと一体と

考えられていたわけですね。その年の秋に行う大嘗祭と一体のものである。そこから大嘗祭のことを踐祚（せんそ）大嘗祭と呼ぶ習慣が出てきたんですね。踐祚・大嘗祭、これはどういう意味かという、新しい天皇のところへ神器を移す、これが踐祚と中国風に呼ばれるようになったわけです。踐祚といいますと、祚というのは天皇の位なんですね。踐というのは実践の踐で足で踏む、行うという意味ですから、つまり天皇の位につく、即位と同じ意味ですね、意味としては。これを踐祚と呼んでいるんですね。そして、それと一連のものとして大嘗祭が行われる。そういう考え方が生まれてまいります。ですから今日大嘗祭に関する書物なんかでも「踐祚大嘗祭」と題した本があるのもそのためですね。そういう伝統があります。そしてですね、実は平安時代に入って8世紀の末ですけど、すべてが唐の風をまねることが盛んだったんですね。「中国風でやろう」というわけですね。そこで中国風の天子の即位礼をですね、それをそっくり輸入したわけなんです。それで新たに、更に唐製の、中国式の即位式なるものを別に、更に行うという風が変わってまいります。ですからここで王位継承儀礼は三つになっていくんですね。つまり、天皇が替わった直後の踐祚の儀式があり、それからその秋の大嘗祭があって、それから別に中国の真似をした即位礼、即位式ですね、の儀式がある。この三種類になっていったと考えられます。

そこでですね、最後のところで現在それはどうなるのかということをご説明しますが、今日、戦前の日本でやっていた順序というのは、踐祚があり、それから即位礼及び大嘗祭が次の秋にあります。そういう形式ですね。これはどうしてそうになっていったかということは後ほどご説明しますが、先ずこの踐祚、大嘗祭、即位式という三つがあることを覚えていただきたいと思います。このうちですね、即位式というのは徹頭徹尾中国式であります。例えば天皇が着ける衣装なども唐の王朝で使っていた袞冕（こんべん）と言いましてね、袞というのは着物の名前なんですね、ふわっとしたものらしいんですけど、冕というのは冠の名前なんですね。中国式の衣と冠を着けて中国風の儀式をしたものです。これが即位式です。ですから、今日でも議論がありますのは、踐祚大

紀 要 1

嘗祭は一体のものだということは言えるんですね、確かに。そしてこちらが本当の即位式なんだという主張が今日でも盛んにあるのはそのためなんですね。つまりいわゆる即位の儀式というのは、中国のものを模倣したもので後で生まれたことは事実ですね。それはそのとおりであります。

それではですね、大嘗祭というのは大掛かりな新嘗祭、そしてこれは一代一度、つまり天皇が新しく天皇になったときだけその初めに行う新嘗祭であります。天皇が二回天皇になる重祚ということが古代にあるんですね。こういう例がいくつかあります。その場合はもう一回大嘗祭をしたようですが、ともかくも新しい天皇になったときだけ行うわけであります。それでは元々はこれは新嘗祭、更に言えば村々の新嘗ですね、ですからこれは稲の収穫祭であることは基本的に変わらないわけです。稲の祭りなんですね。そして収穫の後に行う祭りであります。そして本来ですと新嘗祭はどういうふうにやって、大嘗祭はどこが違うか詳しく申し上げなければいかん処ですが、時間の関係もありますので、まず新嘗祭を大掛かりにするんだということが基本です。そしてですね、新嘗祭はその年にとれたお米、これで御飯を作り、お粥を作り、それからお酒を作り（白酒（しろき）、黒酒（くろき＝どぶろく用のものですけど「くろき」って言ったって茶色い、そうですね、ちょっと薄い茶色ぐらいの感じです）そういうものを作ります。他にお米だけではありません。粟を使って御飯とお粥を作ります。それから海産物、野菜等々。海の幸山の幸、そういうものも使いますが、中心は新穀で作った御飯、お粥とお酒ですが、これを天皇がただ一人神に供えるんですね。そして天皇が神と対座をして一緒にそれを飲食して、そして終わると、それを神饌といますが、お供えものを次々と下げるわけです。そしてこれを二回するんですね、新嘗祭は。二回するという意味は諸説あります。しかし、宵の儀（夕方の儀式）と明けの儀（暁の儀式）ということで日没から翌早暁まで行いたいへん大掛かりな祭りです。これが毎年行われる新嘗祭であります。ところがですね、大嘗祭の場合は形の上では二つほど大きな違いがでてきます。一つはですね、新嘗祭で捧げる神穀（お米）ですね。これは特にどこからということはありません。大体江戸時代から明治の前半ぐらいまで

は、山城国の御料地つまり天皇領から取れたお米を使っていたんですね。明治25年からですね、伊藤博文のアイデアでもって全国の農民に献納を呼びかけて、全国で慎んで作ったお米を宮中に差し出して、それで新嘗祭を行う。それからその後ですね、天皇が田植えをするということが始まって、今の天皇も何かやっていますけどそれも新嘗祭で一緒に使ったということに変わってきています。特にどこからということはないわけですね。日本で取れたお米の、という意味でしょう。ところがですね、大嘗祭では非常に厳格に決まっています。これは斎田を決めてですね、この斎田から厳重な方法でもってとりいれたお米をですね、都へ運びます。そして都ですね、精米をしたり、お酒に醸して、そして他の草々の食べ物もそこで調理するんですが、そこから大掛かりな行列を作って大嘗祭の斎場へ繰り込むんですね。こういうことが行われます。ですから斎田を定めるということが一つあります。大体、斎田、つまり神に捧げるお米を作る田は二ヶ所に決めることになっております。そしてこれはですね、都が基準です。都の以東以南で一ヶ所、それから以西以北で一ヶ所ということになっております。そして大体これはもう習慣としては国は決まっています、今日の名前で言うと一つは滋賀県が多いですね。もう一つは岡山県か京都府だったんです、近代に入って福岡県にした例がありますけど大体場所は決まるんですが。そういうこと一切を亀卜によって定めることになっております。これは中国の殷代に行われたと言われております。亀の亀甲（亀のこうら）に穴を開けて火で焼くんですね。そうするとヒビ割れが走ります。ですからこれを見て占いをするわけですね。これを亀卜と言います。卜という字はヒビ割れから来た象形文字だという説がありますね。卜によって定める、卜定するというのが伝統であります。それでこの亀卜によって定めた二つの田が斎田となります。でその田がある国を斎国と言います。そして一つを悠紀田（ゆきでん）と言います。それからもう一つを主基田（すきでん）と呼びます。この言葉の意味にも諸説ありますが、悠紀というのは神聖なお酒であろうと普通言われております。主基というのはそれに次ぐもの、次の意味であろうというのがほぼ有力な説であります。そういう悠紀、主基二つの田を決めまして、そこで厳重な手続きで稲が栽

紀 要 1

培されるわけであります。そして秋になるとそれを取りいれて、これはもう間にいちいち朝廷から使いが来るんですね、稲穂の使いというのが来て、そして最後は抜穂の使い、稲を刈り取るわけですね、そして都へ運ぶ……（テープ反転）……神饌に作るわけです。そしてこれが第一の違いであるわけです。

第二の違いは大嘗宮という大嘗祭のための御殿を新たに作ります。これは大嘗祭だけのために作る御殿ですから、大嘗祭を前にして、伝統では7日間で作るんですね。非常に短期間で作るんです。そして終わるとただちに壊しちゃうんです。そういう伝統があります。そういうふう到大嘗宮と申します。これを作ります。これは平面図なども最近では方々で紹介があります。じつに大掛かりなものなんですね。数十にのぼる大小の建物が並んで、しかも作り方にいろいろ決まりがありまして、木の皮を剥がないで黒木の柱を使うとか、屋根は萱でふくとかいろいろな決まりがあるんですけど、まあとにかく大掛かりなものです。これを作りましてこれが新嘗祭と違う点です。なぜかと言うと、新嘗祭は伝統的に宮中にある特定の殿舎で行います。今日では神嘉殿というのがあってここで行われますね。これはたいへん古い伝統がありまして京都の皇居は大裏といいますね。その大裏の一番中央に中和院がございまして、その殿舎に神嘉殿が作られます。この神嘉殿は新嘗祭だけのための殿舎ですけど他には使いません。特別な殿舎ですね、ここで同じ祭りを二回やるんですね。夕方の儀式と明け方の儀式、二回やります。ところが大嘗祭の場合はここは使わずに別に大嘗宮を作るという違いがあります。そして大嘗宮の中で行われる次第というのは新嘗祭とほぼ同じであります。つまりその前日に天皇に鎮魂祭というものがあまして、天皇の魂のボルテージを高めるんですね。これは毎年の新嘗祭でも前の日は鎮魂祭を致します。鎮魂というのは魂を鎮めると書きますけれど、古い読み方では「みたまふり」であります。つまり魂をエンカレッジすることなんではないでしょうかね。奮い立たせる。また御霊鎮めでもあるんです。それはあまり分かりやすくやると長くなってしまうかも知れませんが。どういう意味かと言いますとね、今日の解釈では天皇の霊力というのは稲を実らせるのに専ら働かされるわけですね。そのための王ですから。そのためにですね、

ほぼ1年たつともう次の年の稲が取り入れられるころになると、痩せ衰えてボロボロになって力を失っていると考えたのであろうと解釈されます。つまり弱っちゃっているんですね。そして次の大事な祭りである新嘗祭を行うにあたっては、ボロボロになって弱り切った魂では、霊力ではだめであってそれをもう一度奮い立たせて、力を与えてですね、霊力に満ち満ちた天皇が新嘗祭に臨む。そういう考え方から、前の日の夕方、鎮魂祭が行われたのであるという解釈されております。ですから鎮魂祭というものはたいへん興味あるので、私はよく宗教学の講義なんかの時は呪術の例をひくんですけれど、何をするかと言うとですね、天皇自身は追衾（おぶすま）に包まれてふせっているんです。何か寝具のようなものをかぶって寝ているんでしょうかね。そして祭りが行われるところに運ばれるのは天皇が身に着けている衣、肌着のようなものらしいですね。それと天皇の臍の緒を入れてあるらしい「おたま箱」なるものがあります。それが運ばれるわけです。そして、どういう儀式をするかと言うと細かいことは略しますが、左右に十回ずつその衣を振るんですね。なぜ振るかと言うと、魂を力付ける意味だというわけです。呪術の類なんでしょうね。それからもう一つ、おたま箱の方ですが、これは紐をかけて縛った箱なんですね。これはですね、掛け声と共に紐を縛っていくんです。これはなぜかと言うとですね、天皇の魂がですね、どっか浮遊し始めている。だからそれを中府に収める。中府というのはどうもおへそのあたりのことを言うらしいんですね。鍼でもって中府というのは肩のところなんでこれはどうも違うらしいので、中府と古来言ってますが、おなかの真ん中に魂を据えて、そして奮い立たせる。それがどうも鎮魂祭の意味らしいですね。ですからこれをまず行います。そして新嘗祭に臨むわけです。これと同じことをやはり大嘗祭でも行います。

そして、大嘗祭の祭儀ですが、細かい点は省略せざるを得ませんが、天皇はお湯でみそぎをします。体を清めるんですね。そしてですね、大嘗宮には二つの殿舎が中心にあります。悠紀殿と主基殿といいます。悠紀殿の方には悠紀の田からとれたお米を供えますね。主基殿の方は主基の田からとれたお米を供えます。同じことを二回やるんですが、まず悠紀殿へ行くわけです。で、悠紀殿

紀 要 1

の外陣（げじん）といいますか、建物の外ですね、付属の建物とお考えください。そこにまず天皇は入るわけです。

そうしますと、その次にですね、十姫十男つまり10人の男性と10人の女性、合わせて20人が行列を作ってですね、神饌を捧げて行列でもって繰り込むわけです。これを神饌行立（ぎょうりゅう）と言います。これはたいへん大掛かりなものなんですね。全部何を持っていくかというのは決まっています。干物があったり、あつものがあったり、食物の歴史の上から面白いですね。そういうものを捧げる。中心はさっき言いましたように、米の御飯、それからお粥、白酒、黒酒、その辺が中心であります。そしてですね、それを中に運び込むわけです。行列が運び終わって去りますね、そうしますと天皇は内陣に入るわけです。いよいよ神の祭である場所に入るわけです。そして一品ずつ自分の手で供えていくらしいんですね。なぜ「らしい」と言うかということ、それから次は秘儀なんです。だからこれは天皇以外には知らないことになるはずなんですね。絶対他言できない。だから良く解らないんですが、まあ供えるのでしょう。

そしてですね、この時にその内陣がどうなっているかというのは平安時代ごろから補説図といいますけど、平面図のようなものが世の中に出ておりましていろんなことがわかるんですけれども、一つは神座があるんですね。ま、当然ですけども。そしてどうも、その神というのが、今日でも説が分れるんですが、新嘗祭・大嘗祭で祭る神は何かというのが定説がないんですね。一番差し障りのないところでは天照大神だろうということになるんですけど、いろんな見方があって結びの神だという説もあるんですね。八百万の神、天神地祇がそこに来るとい説もあります。ただ、非常におもしろいことは、大嘗祭の（新嘗もそうありますが）神座というのは、寝所になっています。寝座なんです。手取り早くいえばベッドなんです。ですから枕があります。それから布団が敷いてありますね。靴がそろえてあります。そばに衣類を脱いで置く台があります。そしてどうやら古来の神においてはですね、大嘗宮（この場合悠紀殿ですが）に神が長い旅をしてきて、入ってきてそこに寝るらしいんですね、ほこりをはらう道具なんかまで用意してあると伝えられているんですが。そこへ天皇が

入ってきて食べ物を供えるんですね。おそらく神と共にそこで飲食をするとかいわれております。ですからそこで神と交流するんですね。一体になると言ってもいい。そしてそれが終わると天皇は出てきて、廻立（かいりゅう）殿ですが、もとの殿舎に戻るわけです。そこでもう一ぺんみそぎをして暁の儀（明けの儀）に臨む。これは主基殿ですね。そういう順序になります。ですからこれはたいへん大掛かりな祭りでありまして、毎年の新嘗祭でもたいへんなんですね。時間がかかって、夕方から始まりまして、深夜2時3時まで及ぶということです。

そしてですね、もう一つの違いについていうと、新嘗祭は卯の日なんです。これは古来から伝統があって11月の下の卯日ということに祭りの日はなっております。大体大嘗祭も同じように行われています。新嘗祭の場合は翌日宴会をするんです。これを豊明（とよあかり）の節会ともうします。豊楽院でいたします。なぜ豊明というかという豊明という言葉はお酒を飲んで顔が赤くなった様子なんだそうです。だから豊明の節会というのは酒宴の意味だろうと言われております。これを一日やるわけです。これはかなり重要な意味であつたらしくて、古来、新嘗祭のことは「新嘗会」というのが普通なんですね。「会」というのは節会で、宴会のことです。ですから新嘗会とか大嘗会とか、明治以前の古いものではほとんど「会」と書いてあるのはそのためなんですね。節会が重要なわけです。

それから、大嘗祭の場合はですね、三日間にわたって行います。さっき言ったように寅の日の鎮魂祭を行いますね。卯の日に大嘗祭がありますね。それで辰の日の明け方までかかりますね。すると辰の日には悠紀の節会が行われます。まず最初の宴会です。それから巳の日には主基の節会、第二の宴会。それで最後の日にお酒が中心の豊明の節会が行われる。だから三日間にわたって宴会が続く。そういうわけです。ですから、これは余程印象が強かったものと見えて平安時代以来の文献でも、普通大嘗祭のことでも大嘗会といってるみたいですね。それはですね、お祭りは天皇が一人でやることなんで、そう関係ないけど、宴会の方はみんな興味があるから大嘗会といったかということとそうでもないんで

紀 要 1

すね。これはですね、おそらく一番最初の形というのはお祭りに加わった者、村の者すべてと一緒に神と共に新穀を食べたのであると考えられます。で、こういうのは原始宗教の communion（神人共食）なんですね。神と一緒に食べる、そして神の力を身にもらうんですね。communion であったろうと考えられます。で、おそらく新嘗祭・大嘗祭は宮廷儀礼として整っていく過程で、その communion の本来の役割は天皇に集中していったようだ。だから天皇がただ一人で飲食をする。しかし、そこで切り捨てるわけにはさすがに行かなくて、今度は捧げたものを家来たちに与えてみんなで宴会をするという祝宴をその後に置いたのであろう。ですから本来からいえば、これは祭りの中に入っていたんじゃないかと考えられますね。ところが宮廷儀礼になってから後の形では大嘗祭が終わった後の宴会なんですね。だけど、その重要度ということは長い記憶だったんじゃないでしょうか。それで新嘗祭のことを新嘗会（しんじょうえ）といったり、大嘗祭のことを大嘗会と呼び習わしたんじゃないかと考えられます。

これは今でも神社神道がそうなんですね。神社神道で直会（なおらい）というのがありますね。これは起源はおそらく神人共食なんです。ところが今の解釈では「なおりあい」である。祭りが終わって座を改めて「なおりあい」だというんですが、これは御承知のように祭典が終わると社務所の2階かなんかに集まって折り詰めやお酒が出る。そういうふうになり離そうとしていますね。そういう変化というのは一番早く宮廷儀礼に現われたんじゃないかと私は考えております。

さて、もうそろそろ時間でありますので、簡略に致しますが、このように大嘗祭というものは稲の収穫祭ということが基本にあります。これは動かないですね。ところが単なる稲の収穫祭だろうか？という疑問が出てきます。それはですね、天皇が即位というか、代替わりをして最初に行う一度だけの祭りということですね、やはり天皇の支配、統治といいますか、と一体の祭りであるはずなんですね、当然。それでですね、初めて「いったい大嘗祭というのは単に稲の祭りか？」という疑問が出てくるわけです。多くの新聞はですね、今日

大嘗祭の意味になると「これはそもそも稲の収穫祭である」と説明しますけれど、それはちょっと問題があるんです。それはなぜかといいますと、大嘗祭の整った形を検討してみますと、これはもう一つ王権の祭り、王権祭という性格が非常にはっきりあると考えられます。それは例えばですね、主基田とか悠紀田というのは何だろうという、これは日本国土の代表なんですね。つまり日本を支配しているぞ、と。そこから取れたお米は都に持ってきて天皇のもとに来るんだぞということをデモンストレートするために設定されるんじゃないかということがまず考えられるわけです。

それからもう一つですね。祭りの儀式の細かい手順の中に随所に（これはもう今日はやめますけれども）古事記・日本書紀など天皇制神話から由来することが行われるわけですね。そういうしぐさがあるわけです。

それからもう一つですね。この祭りの間にですね、いろいろな広い意味での儀礼が営まれます。例えば歌が歌われます。それから舞いが舞われます。等々ですね。そういうものを調べていきますと、こういうものの中には明らかに服属儀礼が含まれています。服属儀礼というのはどういう意味かといいますと、日本の古代国家の成立、つまり天皇による日本統一ですね。これは神武天皇の東征という神話になっていますけど、神武天皇が第一代の天皇になったという神話になりますけども、それは武力平定だったんですね。つまり原住民のゲリラ的抵抗を圧殺して、そして天皇が即位したということになるわけです。そうしますとね、古代国家にとっては、この大嘗祭ができた段階というのは、まだ7世紀末から8世紀という段階ですね。こういう段階になってきますと、まだまだ日本列島の主要部分はもちろん大和天皇国家の支配下にありますが、東国はもちろん支配に服していない。それから西南の方も隼人その他いた地域などもなかなか従わなかったわけですね。そういうまだまだ服属しない地域を抱えているわけです。そしてなおですね、従えたという記憶は生々しかったと思うんですね、まだまだこの段階ではですね、武力で国家を作ったんで。そこでですね、大嘗祭に服属儀礼が織り込まれたのはそのためだろうと思うんです。つまりこれは王権というものは、武力で作ったということをデモンストレート

紀 要 1

する機会として、こういうものを行うのであると考えられます。例えば、吉野に住む国栖（くず）と呼ばれる人々がいます。これは土着民ですね。これは結局朝廷に従うことになるんで、この国栖が歌を歌ったり、舞いを舞ったり致します。それから悠紀の国、主基の国も国風（くにぶり）といいまして、民謡のようなものを歌います。古言（語り伝えられたもの）を語ったりするんですが、もう一つ注目されるのは、隼人が活躍するんです。隼人というのは九州の隅、西南の隅あたりにいた勇猛な部族ということになっていて、ずいぶん抵抗したらしいんですね。結局鎮圧されて朝廷に従って、勇猛であることを買われてですね、都の、皇居の番兵のような役を割り当てられていたと言われています。この隼人がですね、どういうことをするかと言いますと、犬の鳴き真似をするんです。これは非常に奇妙なこととお考えになるでしょうけれども、例えばですね、「皇家御即位次第」という書物が漢文調で書いてありますが、この中にですね、「隼人はえること三声」。これはどういう意味かと言いますと、隼人というのは耳の尖った犬の頭のような頭巾をかぶるんだそうです。それでですね、犬の鳴き真似をするらしいんですね。これはケンソウです。犬声を発するんですね。そして三回ワンワンとはえるっていうんです。それから後、舞いが始まるんですが、これは何を意味しているかという、人間が犬の真似をするということは、忠犬ハチ公の類であって、忠誠を尽くして従順であるということを示すものだろうと解釈されます。ですからこれは隼人のようなものであっても天皇の威光の前にひれ伏して、犬のようにおっぱを振って仕えていますということデモンストレートする服属儀礼じゃないかと解釈されます。この隼人のほえるやつはもう中世で滅んでいきます。だから今日ではもうありません。記録には書き伝えられておりますね。

ですから王権確立の祭り、服属儀礼を伴う王権確立の祭りという性格が同時にあるんだということが非常に重要だと思います。そういう意味で大嘗祭というものは稲の祭りではありますけれども、単に稲の祭りと解釈してはならないと私は考えています。

それで、もう時間でありますので、近代・現代の問題であります、現在問

題になっておりますのは、戦前は今申しました践祚・即位礼・大嘗祭、これは登極令という皇室令で定められて法的根拠がありました。ところがこれは敗戦と共に廃止になっております。ですから今日根拠になるものは皇室典範に、即位したときは即位の礼を行うという条項だけなんです。即位の礼を行うという内容は何だという規定はありません。天皇が即位をしたということを内外に示す儀式であれば何をやったって、実は未決定、はっきり決まっていないうですね。しかし、先の大葬の場合にもやりましたように政府としては、戦前のです。昭和天皇の儀を再現しようとしていることは明らかです。その場合には、登極令によって行ったんです。ですから登極令に従って11月に京都で即位礼、大嘗祭を行ったんです。これは秋冬の間に京都で行うという規定があってそれに従ったわけです。ですから、その通りにやるとすれば来年の秋に予定されるということになると思います。それはなぜかという、明治維新後、天皇の喪は一年と皇室服喪礼ではっきり決まっていたんです。そのために、1月7日に死んだんで、満一年間喪中なんです。で、満一年の喪があけて1月8日からすぐ即位式の準備を始める。そして、稲を取り入れるのが秋ですから、その年の秋にやるというのが政府の構想のようですね。しかし、非常にはっきりしていることは、内容は特に法的根拠はありません。ですから、アメリカの大統領就任式のような就任宣言でもいいことなんです。法的には何ら問題はない。しかし、政府としては戦前のものを再現したい。百億、百数十億の予算を投入したいという心構えのようですけれども、そこで問題になるのは、戦前の通りだと大嘗祭はいったいどうするのかという問題があります。大嘗祭は今申しましたように、神様が出てこないで大嘗祭ができないわけですね。これは当たり前の話で、お祭りなんです。最も重要な祭り、皇室神道最大の祭りですから、もちろんこれは宗教的活動以外の何物でもないのは当たり前のことです。ところが今日の憲法では国及び公共的機関は宗教的活動をすることは禁じられております。国の行事としてはできないということなんです。非常にはっきりしております。ですから即位礼—宗教と関わりない即位礼—はできます。これは当然できますけれども、そうでないものについては憲法上問題

が残ります。「露骨な憲法違反」という批判が当然出ます。そのためにですね、それをどう回避するかということで「皇室の伝統」とか「これは宗教とは違う」とかいろんなことが言われつつあるようですけれども、明らかにこれは神道の祭り、しかも重要な祭りであることは明らかであります。しかもですね、今日の憲法は主権在民の憲法であります。これはもう憲法自身が明記しております。そういう中であってですね、古代にできた王権の祭りや服属儀礼が何で税金で再現される必要があるのかという大きな問題がありますね。つまり天皇は象徴であるという現憲法の下では、これは所詮象徴なのであって国王じゃないのですから、王権の祭りなんてですね、国費でやられては大変迷惑であるという反対が当然強まるであろうと思われます。そういう面で政教分離問題を含めていよいよ迫ってきた大嘗祭については大きな問題が今日生じているということはこの機会に御関心を持っていただきたいと思います。時間でございますので、以上で終わらせていただきます。

質 問：

今のお話しですと、天皇は祭司であるということでしたが、戦前の憲法などでは天皇が神自身ということになっていると思うんですが、そこらへんはどういうふうにして出て来たんですか？

答 え：

古代以来の伝統では、祭司王、つまり祭祀をすることで王権を確立した王なんです。祭りをすることで王権を確立し、保つ王。そういう性格だと思います。ですから本来天皇は人間なんです。当たり前ですが。だけれども国を代表する最高の祭司として、そして神と交流できる特別な人だと、そういう捉え方だったんですね。ところが明治維新後は天皇は完全な意味において神だと言いだしたわけです。これは現人神だとか現御神（あきつみかみ）とか言われる神です。この場合の神というのはですね、普通の人であるけどお祭りをして神と交流して特別な霊力を持つんだということと違って、人間と隔絶しているということなんです。ですから今日言われていることは、これはおそらく

明治維新政府の官僚たちが、神観念を学んで「これで行こう」ということにしたんじゃないだろうか。そうなりますと、天皇というのは人間の形をしているけれど、実は神様だ、絶対の正義とか最高の道德とか、真理とかを体現している人間だということにならざるを得ないんですね。そういう矛盾を当然はらんでいるわけです。そしてですね、同時に明治初年から宮中の祭りというものを非常にたくさん新しく作って来るんですね。古事記・日本書紀に基づく祭りとかですね。皇室の祖先(?) 祭りだとか、そういうものを次々作っていくわけです。そういうのはすべて天皇が自ら行う祭りだということにしたわけです。ですからそういう意味の権限を祭祀大権と言ったんです。そしてこれは憲法ではなくて皇室典範、皇室祭祀令に根拠があったわけです。そういう体系を作ったわけです。ですからそういうふうに戦前の天皇は政治上の元首で、政治大権を持ちますよね。軍事上の最高司令官で統帥権、軍事大権。そして、宗教の世界では祭祀大権。それでその本人は神様だ。現人神天皇。そういう構造を持っていたんですね。これは極めて複雑極まる構造ですけど、そういうものを建前としていたということです。

(本稿は、1989年6月6日に本学でなされたフォーラムでの講演であって、文責は編集部にある。)